

## 「わたしとフランス語」をめぐる対話活動

### L'activité dialogique sur « Moi et le français »

今中 舞衣子

IMANAKA Maiko

Université Osaka-Sangyo

imanaka@las.osaka-sandai.ac.jp

#### 0. はじめに

筆者は、2009年に大阪府立大学で3~4年生向けの「DDC フランス語」クラスが設立された当初から4年間、授業担当者として教科書を用いない対話型のフランス語活動を実践してきました。学習すべき内容を全て教員が準備しておくのではなく、学生どうしの対話の中からうまれる学びを重視するという視点で、学習活動をデザインしています。

2012年度後期の授業では、「わたしとフランス語」をテーマとした対話活動、プレゼンテーション、作文集の製作を実施しました。プレゼンテーションのセッションでは、学生たち自身が司会進行をつとめ、公開授業の形で下級生や他大学のフランス語教員にも参加してもらって意見交換をしました。

アトリエでは、授業で行った活動の一部を模擬授業形式で体験していただきながら、本活動全体のプロセスを具体的に紹介しました。その後、多様な参加者が集まり対話を通してお互いを知るといった活動の中で、学生が遭遇する困難の特徴、その解決策についてのアイデア、活動デザインそのものの改善点などについて、参加者全員で話し合いました。本論稿は、このアトリエでご紹介した実践について報告するものです。

#### 1. 「わたしとフランス語」授業実践の概要

本実践は、2012年度の後期授業で実施されたものです。大学3~4年生が中心の2レベルのクラス（Aクラス・Bクラス）で同時に実施されました。どちらのクラスも、当該年度は8名前後の参加者数でした。

両クラスにおいては、参加する学生にさまざまな面での多様性がありました。例えば、いわゆる仏文専攻が存在しないため、学生の専門分野に多様性があり理系・文系の学生がともに学ぶ環境にありました。また、本人の希望で1~2年生の学生やフランスからの帰国生、長期留学経験者、フランス人留学生などもクラスに参加していました。本実践はこうした異なる学習背景や能力を持った学生ひとりひとり全員が、フランス語による活動に参加し主体的な学び手となれる学習環境をめざしてデザインされました。

学期の前半にあたる7回の授業では、学生自身にクラスで話し合いたいテーマを

## Rencontres Pédagogiques du Kansai 2013

決めてもらい、そのテーマに沿った対話活動を実施しました。学生から提案されたテーマには、例えば下記のようなものがあります。いずれも、提案した学生の経験や現在おかれている状況を反映したテーマであることが分かります。

- Les différences de consommation entre les Japonais et les Français
- La femme, le travail et le mariage
- Le dire directement ou le garder pour soi
- La recherche d'un emploi au Japon

このように学期前半では、学生自身が興味を持っているテーマについて他の学生と話し合う機会を設けることで、活発に意見交換のできる場づくりと、対話型の授業形態に慣れ自分たちで活動を進められる実践知の獲得をめざしました。

いっぽう学期の後半にあたる8回の授業では、「わたしとフランス語」という共通テーマをもとに、発表会の実施と作文集の制作を目的とする活動を行いました。

準備としての対話活動においては、フランス語に関する「わたしの履歴書」をもとにした対話、「十年後のわたし」についての対話、「わたしはなぜフランス語を学ぶか」についての考察、「フランス語に関するエピソード」の語り、「聞き手にとって良い発表・悪い発表の特徴」についてのディスカッション等を行いました。

発表会が近づくと、学生たち自身の話し合いによる企画調整を行いました。また、発表ごとに担当の司会者をつけることになったため、発表者と司会者とのペアでの打ち合わせを行いました。司会者の役割は、発表の前に発表者の紹介と発表内容についての簡単な紹介を行うこと、質疑応答の際の調整役を行うこと、質問が出ない場合に自ら質問をすること等多岐にわたっているため、事前にペアの相手の発表内容をよく理解しておく必要があります。そのため、必然的にお互いの発表内容やフランス語の表現などについて再度話し合う機会になりました。

発表会は、公開授業の形で他大学のフランス語教員やフランス語を学ぶ下回生を招いて実施されました。参加してくれた先生方の体験を聞く機会もあり、ゲストの存在はクラスの学生にとって非常に良い刺激となりました。また、ゲスト側からも「自分の授業の参考になった」（教員）「フランス語を続けてこの授業を受けたいと思う」（下回生）などポジティブな意見が寄せられました。最後に、学生どうしで最終チェックをした全員分の原稿を綴じて、作文集を制作し配布しました。

一学期の流れは以上の通りですが、一回の授業（90分）はおおよそ次のような手順で実施しました。

- ① アイスブレイキングの活動
- ② ワークシートをもとにしたペアやグループでの対話活動
- ③ ポートフォリオシートの記述によるふりかえりの活動

## 2. 対話活動の事例

次に、実際の対話活動（上記②）の事例について、もう少し詳しく説明したいと思います。



## Rencontres Pédagogiques du Kansai 2013

### 事例3：わたしはなぜフランス語を学ぶか（きっかけ・過去・現在・未来）

学生は、これまでの対話活動をふまえ、資料3のようなワークシートをもとに、「わたしはなぜフランス語学習をはじめたのか」（きっかけ）、「なぜ続けたのか」（過去）、「なぜフランス語を学んでいるのか」（現在）、「なぜ続ける／やめるつもりか」（未来）という4つの質問についての自分なりの答えを考えます。幸いにも全員がフランス語を続けると答え、それぞれの未来像に関わる理由が提示されました。フランス語をはじめたきっかけについては、高校の地理の先生がフランス語が公用語となっているアフリカの国々について研究していたから、初修外国語のパンフレットでフランス語だけ学生の描いたマンガが載っていて楽しそうな雰囲気だったから、など興味深い理由がたくさん提示されました。学生は資料4のようなワークシートをもとにクラスの複数の学生とペアになってじっくりと対話活動を行いました。学生のふりかえりからは、フランス語学習への動機づけが比較的低い学生も、他の学生の話聞いて刺激を受けたことが分かりました。

この活動は、これまでの対話活動をつなげ、「わたしとフランス語」についてのより深い思考を促し、最終発表のテーマを見つけてもらうことをめざしてデザインしました。

<b>POURQUOI</b>	
<p>LE DÉBUT : Pourquoi j'ai commencé à apprendre le français.</p>	<p>( )</p> <p>LE DÉBUT :</p> <p>LE PASSÉ :</p> <p>LE PRÉSENT :</p> <p>LE FUTUR :</p>
<p>LE PASSÉ : Pourquoi j'ai continué.</p>	<p>( )</p> <p>LE DÉBUT :</p> <p>LE PASSÉ :</p> <p>LE PRÉSENT :</p> <p>LE FUTUR :</p>
<p>LE PRÉSENT : Pourquoi j'apprends le français maintenant.</p>	<p>Réflexion</p>
<p>LE FUTUR : Pourquoi je compte continuer / arrêter.</p>	
資料3：なぜフランス語を学ぶか	資料4：対話シート

### 3. 本実践の困難と工夫

以上のような実践を行っていく中で、学生はさまざまな困難に遭遇しました。例えば、長期留学経験者と留学未経験者との間に圧倒的なフランス語レベルの差があ

## Rencontres Pédagogiques du Kansai 2013

り、初期の頃は相手の話を理解することにも困難を感じている学生がいました。また、フランス語の問題だけでなく性格上の個人差や他の学生との関係性などさまざまな理由から、自分の伝えたいことがなかなか伝えられなかったり他の学生のやりとりで紹介しづらかったりする学生もいました。学期の途中でフランス人留学生が参入した際には、これまでの授業の流れを知らずに日本人学生の文法的誤りを一方的に修正することに終始してしまう場合などがあり、学生どうしの学び合いの関係がぎくしゃくしたこともありました。

筆者は、下記のような工夫を続けながら、学生の成長を見まもりました。それは、グループ編成や教室空間を変化させることで学生どうしの対話を促すような学習環境をデザインすること、タスクシートやホワイトボードなど学生の思考を活性化させるようなツールの活用を促すこと、学生の多様性が利点となるような話題や活動を提供することなどです。学生たちは徐々に、教師の介入がなくても自分たちで理解できない・うまく話せない学生を助け、あるいは自分が理解できない・うまく話せない場合は他のメンバーに助けを求め、全員が議論に参加できているかどうか気に配るようになり、グループ全体の対話活動が活性化していきました。

本実践で学生たちは、「コミュニケーション上の問題を克服していくことは情報の発信者だけでなくその場にいる参加者全員の責任である」ということに気づいたのだと筆者は考えています。このことは、現代の「ことば」と「社会参加」との関係においても非常に重要なテーマなのではないでしょうか。

### 4. まとめ

最後に、本実践で重視したことと、その背景となった言語学習観についてまとめておきたいと思います。

本実践は、多様な背景を持つ学生が集まる場において、対話的な関係性が生まれることを最も重要な目的としてデザインしました。それは、使用の文脈から乖離した言語形式の習得を目的とすることでもなければ、フランス語でコミュニケーションが成立することだけを目的としたものでもありません。異なる文化や学習背景を持って教室という場に集まる学生たちが自らのことばで対話に参加するとき、そこには必ず葛藤や困難が生じます。そうした困難を克服していくプロセスから学ぶことを重視するというのが、本実践の背景となった言語学習観です。

こうした実践においては、教室活動はもはや外（＝フランス語を使用しなければならない場面）に出たときのためのロールプレイではありえません。学生は、教室そのものを社会参加の場として、フランス語に関わっていくのです。そのようにして構築されたコミュニティは、授業が終わってもすぐには消滅しません。学生の多くは今でも、留学生をまじえた交流会やSNSなどを通じて、フランス語を媒介としたコミュニティへの参加を継続しています。

ただし、筆者は同じ形式の活動がどのような教育環境においても実施できるとは考えていません。誰かの実践をそのまま模倣するのではなく、それぞれの置かれた文脈でそれぞれのビジョンをもって活動デザインを工夫していけることが教師のめざすべき専門性であるということ、付け加えておきたいと思います。